

二人の采女

寮 美千子

▼近鉄奈良駅前・行基広場

母 (人待ち顔で) へんねえ、近鉄奈良前って約束よね。JRの奈良だったのかしら。あら、あの人、なんだろう？

子ども ママ、あれ、お坊さんだよ！

僧 これは諸国一見の僧にて候。我このほどは、都に候びて落陽の寺社、残りなく拝み廻りて候。これより南都に参らばやと、花の都を旅立ちて、まだ夜をこめて東雲の、木幡の関を今朝越えて、奈良坂過ぐれば転害門、登大路の辻曲がり、行基菩薩の足許へ、行基菩薩の足許へ。

子ども やっぱり、そうだ！ お坊さんだ！

母 じろじろ見ないの！

子ども お坊さん、何してるのかな？

母 托鉢よ。みんなから、お布施をもらうの。

子ども お布施って？

母 お金をもらうこと。

子ども (大声で) へえ、お坊さんて、乞食なんだ！

母 まあ！(あわてて子どもの口を塞ぐ) あれはね、修行なの。お金を恵んでもらう修行なの。

子ども へえ。だったら、ぼくも修行する！

母 なにバカなこと言ってるの。

子ども ねえねえ、ぼくもお坊さんにお布施してもいい？

母 いいわよ。せっかく奈良に来たんだから。はい。

子ども え、たった5円？

母 ご縁があるようになっていう意味よ。さ、いってらっしゃい？

〈チャリーン〉

僧 ナンマイダー。(鈴を鳴らす)

子ども ナンマイダー？ 「ありがとう」だろ。人から何かもらったら「ありがとう」っていうんだろ。

母 あら、この子ったら。(僧侶に) もう、すいません。

携帯の音 (ルルルルル)

母 (携帯を出して) はい。いま近鉄奈良。噴水のある広場。え、JRの奈良駅？
ごめーん。いまそっちへ行くわ。じゃあ。(子どもに) 行くわよ。

僧 ナンマイダー。(鈴を鳴らす)

子ども ナンマイダーじゃなくて、「ありがとう」だろ！

僧 ナンマイダー。(鈴を鳴らす)

子ども ナンマイダーじゃなくて

母 行くわよ！

子ども だって、お坊さん、ありがとうも言えないんだよ～。

母 ナンマイダーが、お坊さんのありがとうなの。

僧 ナンマイダー、ナンマイダー(鈴を鳴らす)

子ども だって、お坊さん…あ、鹿。ママ、鹿がいるよ！

母 走っちゃだめ！

春子 うわっ。あぶねえ。

母 あ、すいません。

春子 ええんだ、ええんだ。

母 太郎！ だから走っちゃけないって。行きますよ！

子ども はい。

春子 ああ、びっくりすた。元気な童(わらす)だ。
ああ、奈良、奈良だ。奈良の空、奈良の風、奈良の香り(くんくんくん)は、
しねげど。ともがぐ、奈良だ！ 奈良さ来だ！(感極まる)あ、坊(ぼん)
さまだ。坊(ぼん)さまがいるでねえが。ありがてえ、ありがてえ！

僧 ナンマイダー。

春子 お坊さま、どうかこれを、これを受け取ってください。

僧 ナンマイダー。

春子 百万円あるだあ。

僧 ええ？ 百万！ うわっ、なななな、何枚だ～。

春子 何枚って、百万だが、1万円札で百枚だ。受け取ってけれ。ああ、ありがてえ、ありがてえ(伏して、拝む)

僧 それでは、これにて。(札束を頭陀袋に押しこんで、春子を拝み、立ち去ろうとする)

春子 ちょ、ちょっと、待ったあ！

僧 な、なにか。

春子 そうはいがねえんだ。ここサで遭ったが百年目。

僧 ええっ？

春子 お坊さまに頼みがあるんだ。

僧 は、はい。わたしにできることなら。

春子 実は、先週、福島之母が亡くなりますて。

僧 それはそれは、ご愁傷さま。（拝む）
春子 いまわの際に、言いのこすた言葉が……
僧 言いのこした言葉が……？
春子 奈良さ行って、いちばん最初に出会った坊（ぼん）さまに、猿沢の池のほとり
りで、供養のお経を、上げてほすいと。
僧 はあ。おかあさまは、奈良にご縁が？
春子 （あっさり）全然。
僧 では、なぜ？
春子 そ、それが、坊さま～（泣き崩れる）

ヒュードロドロという音がして、辺りが暗くなる。
二人がほんのり光のなかに浮かぶ。

春子 うらめしやー。
僧 うわっ（後ずさる）
春子 うらみつらみは骨に浸み、千年万年十万年、消すに消せねえこの毒に、わが
身灼かれて苛まれ、ああ口惜しや口惜しや、なぜにわだすがこのような、あ
あ、供養のお経を、供養のお経を、奈良の都の猿沢の、猿沢の池のほとりで
～。

パッと明るくなる。

春子 とまあ、母が、いまわの際に、そったなことを、口走ったのでごぜえますだ。
僧 は、はあ。
春子 その形相のおっがねごと、おっがねごと。これは祟（ただ）る、間違いなく
祟ると。
僧 た、祟る？
春子 はい。「願い叶わねば千年万年十万年、末代まで祟ってやる～」と。あれは
もう、母ではごぜえませんですだ。何者かさ取り憑（づ）かれてだに、ちげ
えね。いっづも、おかすな事ばかり言って笑わせる母が、あつたなおっが
ね顔で。
僧 は、はあ。
春子 （すがるように）お願いします。供養のお経を。お経を読んで、除霊を。除
霊をしてくだせ～。
僧 じよ、除霊？ そ、そうおっしゃられても、わたしは……。
春子 んだって、お坊さまでしょ。
僧 えっ。ええ、まあ、その……（顔を背けて気まずそうな顔）そのようなこと
であれば、むしろ神主さん頼んで、お祓いをしていただくとか……。

春子 ああ？

僧 れ、霊能者を呼ぶとか……。

春子 なにをごちゃごちゃ言ってるんだ。母の願いは「供養のお経」なんです。それに、あんだ、もう料金はもらったでねえが。

僧 料金？

春子 お経を読めねどいうなら、百万円、返せてくれ。

僧 そ、そんな。これはお布施、喜捨として、ありがたくいただきました。

春子 キシャ？

僧 はい。喜んで捨てるを書いて、喜捨でございます。

春子 冗談でねえが。喜んでいいねば、捨てても、いね。母は、母のサトコは…。

僧 サトコさんとおっしゃるのですか、おかあさまは。

春子 はい。母は里の子と書いて里子。わたしは春子。春夏秋冬の春で春子です。改めてよろしく願います。

僧 は、はい。

春子 母の里子は、はっきり言ったんです。「春子、奈良さ行って、最初に出会った坊（ぼん）さまさ、お経を読んでもらってけれ」と。

僧 で、ですが、わたしは……。

春子 ともがぐ、行くべだ。猿沢の池へ！

断固として托鉢僧の腕を引っ張って歩きだす春子。僧、「そ、そんな、わたしは」などと、ぶつぶついいながら引きずられていく。

▼猿沢の池

春子 さあ、お経を。供養のお経を。

僧 は、はい。えーと……。

春子、じっと見つめる。托鉢僧、頭陀袋から木魚とオリンを取りだし、オリンをチーンと鳴らし、木魚をたたきだす。

春子 さあ、早く、早くお経を。

僧 は、はい。あー、ナンマイダー、ナンマイダー、ナンマイダー、ナンマイダー、ナンマイダー、ナンマイダー、ナンマイダー……。

春子 そんだけなら、素人でもでぎるだ。お経を、本格的なお経を！

僧 は、はい。それでは、えーと、南無、南無、南無妙法蓮華経、ナンマイダー、ナンマイダー、南無妙法蓮華経、ナンマイダー、ナンマイダー……。

春子 ちょっと、ちょっと、おかすんだがね。南無妙法蓮華経と南無阿弥陀仏をいっしょに唱えるお坊さんが、どこサいるだ。あんだ……偽坊主だべ！

僧 (すなおに) はい。

春子 あぎれだ。「はい」って、まあ、いけしゃあしゃあと。

僧 だから、最初から一言も坊主だとは言っていないじゃありませんか。皆さんが勝手にそう思われてるだけで。

春子 ああ？

僧 立ってるだけで、みんな喜んでお金をくれるんです。実は、リストラされて家族にも逃げられ、ホームレスになって、こんなことを始めたんです。お金をくれた人も、いいことをしたっていう気持ちになるから、これで案外、人助けにもなるし。

春子 まあ、ずうずうしいだ。

僧 はい、ずうずうしい。自分でもわかってました。申し訳ない(手をついて頭を下げる)わたしはたったいま決意しました。本物のお坊さんになると！

春子 ああ？

僧 (毅然として) だいたい本物と偽物、どこで線を引くのでしょうか。お寺でお葬式をする人だけが僧侶でしょうか。妻を持ち、酒を飲み、ミシュランの三つ星レストランで喰らい、高〜い戒名をつけ、退屈な法話を語り、ベンツを乗りまわしている人が、僧侶でしょうか。昔から「乞食坊主」と申しますが、それはつまり「こつじき」、托鉢をして行脚し、欲もなく、ひたすら仏に仕える者のことです。駅前広場にいらした行基さまも、もともとは、どこのお寺にも属さずに、自分勝手に僧侶を名のった方だったのです。

春子 へえ。あんた、案外、詳すいんだない。

僧 さっき駅でもらった観光チラシに書いてありましたから。

春子 なんだ、それ。ダメダメ。調子のええごど言って、百万円、返すたぐねえがらだべ。さあ、返すて。いますぐ、耳を揃えて返すて！

僧 しかし、おかあさまは「最初に出会ったお坊さんに」とご遺言なされたのでしょ。わたしはたったいま、ここで、あなたの目の前で、自ら僧侶になったのですから、わたしこそがその「最初に出会ったお坊さん」ではありませんか。

春子 そ、そったな屁理屈。

僧 おかあさまのいまわの際の願いを破ったら、どんな怖ろしい祟りがあるか…。

春子 た、祟(ただ)り。ああ！ 仕方ね。んじゃ、お願いするわ、読経を。

僧 はい。南無妙法蓮華経、ナンマイダー、ナンマイダー…。

春子 ダメダメ、そんなんじゃなぐて、ちゃんとすたの、読んでけろ。

僧 すいません。これしか知らないんです。

春子 どうすっぺ。んだな！ んじゃ、これを。(扇子を渡す)

僧 なんですか、これは。

春子 般若心経の扇子。ほら、ちゃっこい字でカナも振ってあるべ。

僧 あ、ほんとうだ。こりゃあいい。では、参ります。(チーン) 仏説摩訶般若

波羅蜜多心經 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。
舍利子。色不異空、空不異色、色即是空、空即是色……

春子、しきりに拝む。そのうち、物の怪に取り憑かれたように痙攣。夢遊病者のように、池に入っていく。僧、一心に読んでいてふと見ると、春子は半分沈みかけている。

僧 あっ。な、なにをやるんです！ そんな、身投げするなんて。早まっけはいけません。

春子 いいがら、お経を、お経を！

僧 ……究竟涅槃。三世諸仏、あ、いけません。いけません。

春子 いいがら、お経を、お経を！

僧 依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。いけませんたら！

春子 いいがら、お経を、お経を！

僧 いいからって、そんな。

春子 いいがらって！

僧 は、はい。えーと、どこからだっけ。ああ、ここだ。故知、般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、あ、危ない、危ない、えーとえーと、能除一切苦、真実不虛。故説、般若波羅蜜多呪。即説呪曰、羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶。般若心經 あああああ、沈んじゃったよ。ナンマイダー・ナンマイダー（チーン）

おや、あれはなんだ？ 池の中からだれかが。あのオバハンが生き返ったのか？ いや、違う、あんなに若くもきれいでもなかった。こ、これは…。

M 雅楽の音色。 春子が入水した水のなかから、おもむろに乙女が出てくる。

采女 ♪吾妹子のねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき♪

ああ、これはわたくしに手向けた読経の声か。

僧 あ、あなたは？

采女 ごらんになっての通り、采女にてございます。

僧 はあ。その……なんですか、采女って？

采女 はい。帝にお仕えする女。わたくしのように器量よしで賢い、しかも、由緒正しい里長の娘だけがなれるお役目。奈良の都に上り、帝にお仕えすることを許されるのでございます。わたくしは、陸奥の国・安積の里の里長の娘、たくさんの候補者のなかから、選ばれて、采女となりました。

僧 奈良の都って、ま、まさか、千三百年前の……。じゃあ、さっきのオバハンは……奈良時代の采女の生まれ変わり？！

采女 と、とんでもない。なぜ、わたくしのようなうら若き乙女が、あんなオバハンに転生を…。

春子 なんだって？ オバハンだって、失礼な！（水のなかからざぶんと現われる。時代衣装になっている）

采女 あら、聞いてたの？

春子 「聞いてたの？」が？ だれが坊（ぼん）さんをここサ呼んできてあげたと思っでるが！

僧 は、春子さん、ご無事でしたか。よかった。だけど、なんでそんな姿を。まるで大昔の人みたいな。

采女 春子？ おまえ、春子じゃなくて、乳母の娘の小春でしょ。わたしと乳兄弟の小春。そうよね。安積の里の小春よね。皺のなかに面影が。

春子 皺？（と両手で顔を確かめ）す、失礼（すつれい）な。

采女 ああ、小春……なつかしい。

春子 小春？ 小春って……（暗くなって ヒュードロドロ）

采女 （お化け）うらみつらみは骨に浸み、千年万年十万年、消すに消せないこの毒に、わが身灼かれて苛まれ～。

春子 ああ！ おらがかあちゃんサ取り憑いたア悪霊は、おまえさんだっただのが。

采女 はい。

春子 おやま。やけに素直な悪霊だ。んだけど、だまされねえぞ。おら、すっかりその気にさせられて、お布施の虎の子百万円持って、郡山から奈良へ。

僧 郡山って、すぐそこの？ あの、金魚で有名な郡山？

春子 まさが。この言葉でわがらねはず、ねでしょ。もっとずうっと遠く。

僧 遠く？

春子 福島県の郡山市だ。

采女 わたくし、陸奥の国・安積の里から来た采女でございます。願い叶わねば、未代まで祟ってやる～。

春子 もう叶っただべ。坊さまサ、お経を読んでもらったんだがら。

采女 でも、なんだか怪しげなお経で、わたくし、これではとても成仏できません。

春子 そう言われれば、そんだなあ。んだんだ。あんなんじゃダメだでば。返すてくれ、百万円。

僧 あ、そ、それは。そんなことしたら、こ、この人に祟られますよ。

采女 未代まで祟ってやる～。

春子 なんでだ？！ なんで、わだすばっがり、そったな目に遭わねばねえのが？

采女 小春！ 小春なら、わたしを助けてくれるでしょう。乳兄弟だもの。あんなになかよく遊んだじゃない。ねえ、小春。

春子 え、小春って。わだすは春子。郡山の春子春子春小春！ ああ！ 小春だ。わだすの前世は、安積の里の小春だった！

采女 ああ、思いだしてくれたのね！

春子 んだ！ 思いだすた。思いだすた。ああ、おいたわしいや、おいたわしいや。里長の一人娘のおまえさまが、あつたな無惨な最期を遂げるとは。

僧 無惨な最期とは？

采女&春子 それは、こんな物語だったのでございます！

▼安積の里A

子どもたち、輪になってわらべうたを歌っている。

わらべうた <http://warabeuta.org/?p=126>

子どもたち ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい

♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい

春子 ♪いーだーよ

采女 ♪なにしてだい

春子 ♪いま 流しで 骨ッコかじってた

采女 うわー 賤しこ 賤しこ

里長、やってくる。子ども、散る。春子、さっと引いて地面に伏してお辞儀をする。

采女 あ、おとうさま！

里長 おお、姫はいつも、めんこいのう。きれいじゃのう。

采女 はい、おとうさま！

里長 いい子じゃ、いい子じゃ。安積一の器量よしじゃ。

采女 はい、おとうさま！

里長 そのうえ、だれよりも賢（さかし）い。

采女 はい、おとうさま！ おとうさま、小春は？

里長 ああ、小春か。小春はな、そうだな、おまえのいい引き立て役だ。

采女 あらやだ、おとうさま。お里が聞いたら、怒るわ。

里長 そうだな、お里に聞かれたら、大変だ。乳母のくせして、めっぼう気が強いからなあ。娘の小春を悪ぐいって、おまえがいじめられたら大変だ。悪かった、父が悪かった。小春もめんこい、めんこいぞ。だが、おまえはもっとめんこい。

采女 はい、おとうさま。

里長 姫、忘れてはいけねえぞ。おまえは里長の娘。そこいらの娘とはわけが違う。

采女 はい、存じております、おとうさま。

里長 そうか、そうか。おまえが賢いのも、貴い血筋ゆえじゃ。んだがら、うんと学んで、誰より賢く、美しくなるのだぞ。

采女 はい、おとうさま。

里長 そしてな、都に上って、帝にお仕えするのじゃ。おまえの美しさ、賢さならば、帝の妃も夢ではね。妃になれば、都から遠く離れたこの陸奥の国に、大

きな富をもたらすこともできるはず。

采女

はい、おとうさま。

里長

その日まで、しっかり己を磨くのだぞ。

采女

はい、おとうさま。

里長

ゆめゆめ、他の男に目をくれるなよ。里の男など、もってのほかだぞ。おまえは、いずれ、帝の妃になる身ゆえ。

采女

はい、おとうさま。

声（遠くで）♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい

♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい

M

次郎、歌と同時に、笛を吹きながら舞台を横切る。

采女

おや、あれは？（と、ぼうっと見とれる）

里長

ああ、あれは木こりの息子、小糠の治郎だ。どうかしたか。

采女

（取り繕うように）いいえ、おとうさま。いい音色ですね。

里長

なに、都に行けば、笛の名手などいくらでもいるわ。掃いて捨てるほど。

▼奈良の都A

春子

姫は里長さまの期待通り、だれよりも美（うづく）しく、だれよりも賢く育ったべ。んで、都に上り、帝にお仕えする采女となったのでござえます。

都人1

きれいなおなごじゃのう。

采女

（笑いながら、逃げる）

都人2

かしこいおなごじゃのう。

采女

（笑いながら、逃げる）

都人3

気の強いところが、またかわいい。

采女

（笑いながら、逃げる）

都人4

姫、贈り物でございます。どうか、お受け取り下さいませ。

采女

近寄らないで！ わたくしは、あの方、あの方をお待ちしているのですから。そのお姿は、上りくる太陽のよう。満ちていく月のよう。限りなく貴いあのお方を！ あ、もしやあの方がお越しでは！

女1

帝がいらっしゃる。

女2

帝がいらっしゃる。

都人1

お、雲が、雲が晴れてきたぞ。

都人2

ああ、月が、月が見えてきた。

都人3

美しい月よのう。満月の宴にふさわしい、見事な月じゃ。

都人4

今宵は、帝もお見えになるそうじゃ。

都人1 ずっと、晴れてくれるといいが。
都人2 宴の終わるまで、晴れてくれるといいが。

M 雅楽の音。龍頭船登場。

女1 帝がいらっしゃる。
女2 帝がいらっしゃる。

帝、龍頭船より降りたつ。ゆっくりと歩む。人々、ひれ伏す。なかに、采女がいる。

都人1 大君さま。本日は猿沢の池の月見の宴に、よくお越しくございました。
帝 うむ。美しい月よのう。
家臣たち 仰せの通り。
帝 あ、雲が。
家臣たち あああー（あわてる）
帝 流れていった。
家臣たち ふう。（ほっと胸を撫でおろす）
帝 あ、また雲が。
家臣たち あああー（あわてる）
帝 流れていった。
家臣たち ふう。（ほっと胸を撫でおろす）
帝 あ、またしても雲が。
家臣たち あああー（あわてる）
帝 おお、雲が、月を隠してしもうた。
家臣たち あああー（極限まで、あわてる）
帝 月に群雲も、美しきものよのう。
家臣たち ふう。（ほっと胸を撫でおろす）

帝、歩む。ひれ伏す人のなか、采女、顔を上げて帝をじっと見つめる。

采女 大君さま。
家臣1 こら。無礼者め、頭を下げい。
帝 構わぬ。満ちたる月のごとく美しき乙女じゃ。いずこの者。
家臣1 賤しき采女にてございます。
帝 どこから来た？
采女 安積の里より参りました。
家臣1 無礼者め、帝に直接お話しするなど、身の程知らずが！
帝 よいよい。その采女、今宵、わがもとへ。
采女 はいっ！

春子 その夜、帝、采女を召してけり。

M 雅楽の音、たかまっていく。

M 雅楽の音、ますますたかまり、ぴたっと止まる。

春子 さて後、帝、またも召さざりければ、采女、かぎりなく心憂しとおもひけり。

都女1 お見限りよ。

都女2 一度だけ。

都女3 たった一度だけ。

都女4 遊ばれたのよ。

都女1 名前も覚えてもらえない。

都女2 お笑いぐさね。

都女3 なによ、いつまでもお高くとまって。

都女4 どうせ、陸奥の安積の里の田舎者のくせに。

都女たち (口々に) お見限りよ。お見限りよ。たった一度だけ。一度だけ。遊ばれたのよ。遊ばれたのよ。名前も覚えてもらえない。覚えてもらえない。陸奥の安積の田舎者のくせに。田舎者のくせに。

采女 やめて! やめて!

采女、池のほとりに走っていく。
着物を脱ぎ、柳の木にかけ、合掌をする。

采女 大君さま。いつまでも、いつまでもお慕い申し上げます。この命尽きてもお。

采女、池に飛びこむ。

春子 采女、かく身を投げつとも、帝は、えしろしめさざりいけるを、ことのついででありて……ことのついで? (と怒り露わ) …… (気を取り直し) ことのついででありて、人の奏しければ、聞こしめしてけり。

帝 お、人麿か。久しぶりよの。

人麿 はい、大君さま。そういえば、あの月の宴の夜にお召しになられた采女。

帝 ん? 采女? そのようなことが、あったかのう。

人麿 はい。ひと夜だけ、お召しになられたあの采女、先日、猿沢の池に身を投げ

たそうでございます。

帝 身投げを。なにゆえ、そのような。
 人麿 大君さまをお慕い申し上げてのことと、もっばらの噂。
 帝 うむ。そうか。かわいそうなことを。
 人麿 はい、気の毒なことをいたしました。
 帝 うむ……。そうじゃ、池に参ろう。
 人麿 池に？
 帝 人麿。歌を詠んでやれ。采女に、供養の歌を。
 人麿 はい。仰せのままに。

家臣とともに、池のほとりへ赴く。

帝 さてもさても、池の藻、寝乱れた乙女の黒髪のごとし。
 人麿 まさしく。
 帝 恨めしいことよ。池の水、干上がりてなかりせば、采女も命を落とさずにするだことを。
 人麿 仰せの通り。
 帝 人麿、歌を。
 人麿 ははあ。（短冊にさらさらとしたため）♪吾妹子のねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき、見るぞかなしき。
 家臣たち （朗唱する）♪吾妹子のねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき、見るぞかなしき。
 帝 わしも詠もう。うむ。（短冊にさらさらとしたため）♪猿沢の池もつらしな吾妹子が玉藻かづかば水ぞ干なまし、水ぞ干まなし。
 家臣たち （朗唱する）♪猿沢の池もつらしな吾妹子が玉藻かづかば水ぞ水ぞ干まなし、水ぞ水ぞ干まなし。

帝、袖でそっと涙を拭う。

春子 さて、この池に墓せさせたまひてなむ、帰らせおはしましけるとなむ。
 帝 行くぞ、人麿。
 人麿 はああ。

春子 （顔を上げ）帰らせおはしましけるとなむう？ ちょっと待でえ、待でえ、待でえ。なんだバカにすて。こったな話でええのが？ ええわけ、ねえでね。冗談でねえで。

帝と人麿、家臣たち、びっくりして、後ずさる。僧、飛びだしてくる。

僧 いきなり、ど、どうしたんですか。
 春子 この話（はなす）は偽物だ。おらの国・郡山では、こったな話ではね。
 僧 に、偽物って。
 春子 ええが。耳の穴かっぼじって、よーく聞くんだぞ。プレイバック！

▼安積の里B

子どもたち ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい
 ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい
 采女 ♪いーだーよ
 春子 ♪なにしてください
 采女 ♪いま いずみで おけしょうしてだ
 春子 うわー おしゃれこ おしゃれこ

里長、やってくる。子ども、散る。二人、駆けよる。

采女 あ、おとうさま！ 春子 あ、おどさん！
 采女 なによ、乳母の娘が。あれは、わたしのおとうさまよ。
 春子 いいえ、わだすのおどさんだ。ね、おどさん。
 里長 んだ、小春。（頭を撫でる）
 采女 ちょっと、小春。これ、どういうこと？
 里長 小夏、なじよすた？
 采女 こ、小夏？ わたし、そんな名前だったの？
 里長 お里は、元気か？
 采女 お里って？
 春子 おやま、小夏ったら、自分のおがさんの名前も忘れだの？ お里は、おまえのおがさんでねえが。
 里長 乳の出ねえかかの代わりに、小春に乳をくれて、ほんとうに助かった。おかげで小春もこんなに元気に育って。乳母のお里のおかげだ。
 采女 乳母！ わたしが、乳母の娘だっていうの！
 春子 んだんだ。
 治郎 おーい、春姫、遊ぼう！ みんな待ってるで。
 春子 あ、治郎さ！ 小糠の治郎さだ！
 子どもたち 春姫～！
 春子 おどさん、行ってもええが？
 里長 ええよ、ええよ。さあ、行ってこ。

采女 あ、待って、待ってよ。

子どもたち ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい
♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい (楽しげな笑い声)

春子 おどさんは、村の長。百姓の子どもたちもわだすも、わけへだてなくかわいがってくれます。子は宝、天からの授かりものと。わだすは、野育ちの娘でした。野が、山が、川が、わだすの友で、みんなの遊び場でした。

子どもたち ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい
♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい (楽しげな笑い声)

▼巡察司・葛城王

春子 時が過ぎで、わだすもさすがに娘ッコらすくなくなった、その頃のことでごぜえます。

村男1 都から、勅使さまがいらすた。

村男2 葛城王だ。葛城王のお越しだ。

村男3 ああ、どなんすっぺ、まだ、里長が戻ってこねえ。

村男4 宴だ、宴の仕度を！

葛城王、家臣を連れて登場。

村男1 葛城王さま。よくいらっしゃいますだ。まずは、これをお召す上がりください。

葛城王 なんだ、これは。こんな粗末な。

村男1 ははあ、申し訳ごぜえません。ここ三とせというもの凶作続き、精一杯のおもてなしの品をとかき集めましたのでごぜえませんが。まことに申し訳ごぜえません。

葛城王 里長はどこだ。失敬な。迎えにも出てこないのか。何様のつもりだ。

村男2 里長は、ただいま山里へ出ております。使いの者を出すますたので、すぐに戻ってきますだ。

葛城王 なにい。わしが来るのが分かっている、出かけるとは、なに事！

村男3 と、とんでもない。勅使さまご来訪の報をいただく前に、危急の用があり、取るものも取らず、出かけられたのでごぜえますだ。

葛城王 危急とは？

村男4 このところ大雨が続き、昨晚、山崩れが起きて、民が下敷きになりますた。

里長さま自ら、救出の指揮にお出ますに。

- 葛城王** ふん、なにかと思えば、そんなことか。民草など、土に埋めれば、またいくらでも生えてくるわ。そんなものは放っておいて、早く戻らぬか。
- 村男1** は、はい。じきに、じきに戻りますかど。おい、早く、勅使さまにお酒を。
- 村女1** は、はい。いますぐに。

用意をして出てきた女2の手から、采女、盆を奪うようにして、葛城王のもとへ。

- 采女** 山の泉の清らかな水を用いまして醸したお酒でございます。どうぞ。
- 葛城王** (盃を手に取り、酒を飲む) うむ。酒はうまいな。おや、顔をあげい。
- 采女** はい。(挑戦的に顔を上げ、葛城王をじっと見据える)
- 葛城王** (采女の顎を持ち、顔を右に左に向けさせ) これは鄙には稀なる美しき乙女。
- 采女** (婉然と微笑み) さあ、もう一杯。(酒を注ぐ)

- 男1** 里長さまがお戻りだ。お戻りだ。
- 里長** (駆けこんできて、ひれ伏し) 遅くなって申し訳ございません。
- 葛城王** そうか。そちが里長か。わしがなぜ、咲く花の匂うがごとき奈良の都から、このようなさいはての、みちのくの、陸奥の国、安積の里くんたりまで、はるばるやってきたのか、わかってるだろうな。(話しながら激して、盃を投げ捨てる)
- 里長** もちろんでござえます。朝廷にお納めすべき米が、滞っておりますゆえ。
- 葛城王** わかっていながら、なぜに早く納めぬ!
- 里長** 納められるものならば、いますぐにでも。すかすながら、この三とせどいうもの、陸奥の国は冷害続き、米もいくらかも獲れねえんだ。村々の荒れ果てた様は、道々嫌でも目にはいったっぺ。年貢米を納めれば、民が飢えて死ぬしかござえませぬ。
- 葛城王** 民に食わせる米があるなら、まず帝に納めよ。それが筋というものではないか。草の根や木の実を嚼ってでも帝にお仕えするという心が、おまえたちにはないのか!
- 里長** そんな、ご無体な。民が飢えて死ねば、田を耕す者もいねぐなり、年貢も納められねぐなりますだ。どうか、お慈悲を、お慈悲を。
- 葛城王** 民草など、雑草と同じ。後から後から、いくらでも生えてくるわ。だれのおかげで、この国は護られていると思っているのだ。帝の力、聖なる帝の力で、おまえたちは安泰に暮らせるのだぞ。年貢を納めよ!
- 里長** どうか、お許しを。お許しを。
- 葛城王** なんだと。まだわからぬか。(立ち上がって、刀を振りあげる)
- 春子** あ、おどさん! お許しくださいませえまし。お慈悲を、お慈悲を!
- 葛城王** なんだ、この田舎くさい女は。

里長 娘の小春にてごぜえます。

葛城王 小春だと？ また、顔に似合わぬ名前を。（あざ笑う）

春子 （盃を差し出す）どうか、刀をしまってください。どうぞ、一献。

葛城王 はっはっは。あたかも山猿のごとしといえ、おまえも女のはしくれ。おなごの頼みとあらば、この葛城王、むげにはできぬな。（渋々刀を納め、盃をとる）

春子 ありがとうございます（酒を注ぐ）

葛城王 うむ。（飲み干す）

春子 もう一杯。（酒を注ぐ）

葛城王 うむ。（飲み干す）

春子 もう一杯。（酒を注ぐ）

葛城王 うむ。（飲み干す）

春子 ♪安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾思はなくに♪

人々 （声を合わせて）♪安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾思はなくに♪

治郎 （笛を吹く）

葛城王 （機嫌を直して）あっはっは。面白い、これは面白い。山猿が歌をよくするとは。

春子 勅使さま。わだすどもは、浅い心であなたさまのことを思っているわけではごぜえません。深い心で、お慕い申すあげているのでごぜえますだ。

葛城王 あっはっはっは。面白いおなごじゃ。そうじゃ。小春とやら、都に上らぬか。

春子 （ぎょっとして）都に？

葛城王 ああ。咲く花の匂うがごとき奈良の都に上り帝にお仕えする采女にならぬか。

春子 あの、わだすは……（そっと治郎を見る）わだすには、許婚の治郎さが。

葛城王 村の男か？

春子 は、はい。

葛城王 村の男と帝とを天秤にかけ、村の男を取るとはいい根性だ。ますます気に入った。采女になれ。

春子 そ、そんな。どうか、お許してください。わだすのような田舎娘、都でつとまるはずもごぜえません。

葛城王 だから、面白いのじゃ。美女には飽きた。たまには、そちのような変わり種がいても、よかろう。どうだ、里長。この娘を帝に献じるならば、向こう三年、年貢は免除してやるぞ。

里長 向こう三年……。ははあーっ。ありがとうございます（涙）小春、頼む。村のためだ。頼む。

春子 お、おどさん！

里長 治郎、おめえの気持ちはよぐわがってるだ。んだが、みんなを救うと思っで。

治郎 さ、里長…。小春…。

葛城王 こらあ。何を臭い芝居をしておるんだ。これは朝廷の命令だ。小春を采女に

召すぞ。ありがたいと思え！

里長 は、はい。小春、わかったな。

春子 はい、おどさん、喜んで。みなのためなら、この小春、喜んで采女に。

采女 ちょっと、待って待って待ってよ！ ストープ！

みな、ストップモーション。春子と采女だけが動いている。

春子 なんだ？

采女 話が違うじゃない。全然違うわよ。山猿みたいだから面白がられて都に連れて行かれたなんて、そんな話、どこにもないわよ。きれいだから、だれよりもきれいで、賢かったから、帝に召されたんじゃないの。だったら、わたしよ。このわたししかいないわ。わたしが采女になるべきなのよ。

春子 わがる、わがる。あんだが焦る気持ちは、よーくわかるだ。わだすみてえな女に出し抜かれて、悔しいんだべ。んだが、小夏、あんだは乳母の娘なの。どう転んでも、采女にはなれねえだ。格式ある家の娘しか、帝にお仕えすることはできねえんだがら。おーほほほほ。

采女 な、なに言ってるのよ。里長の娘は、このわたし。わたしよ。あなたは偽物。

春子 いいえ、わだすが本物。気だてがよぐて、誰からも好かれて、村に恋人までいるんだ。笛の上手な、それはそれはすてきな恋人が。

采女 (うつむいて) 恋人？

春子 えーえ。治郎サよ。笛吹の小糠の治郎サ。

采女 え、あのイケメンの？

春子 なんだ。あんだ、ちょっとぐれえきれいだがらって、お高くとまっているがら、恋人もできねえんだ。

采女 なにいつてるのよ。わたしは帝の妃になる娘。村の男となんか、とんでもない。

春子 ふふふふ。乳母の娘が、帝の妃になれるわけ、ねえべだ。

采女 違うわ。わたしは里長の娘。采女になるのはわたし、わたしよ。

春子 いいえ、わだす。わだすが本物の里長の娘。

采女 わたしよ。わたしが本物。

春子 わだす。わだすが本物。付き合っていられね。えーい、さっきの続き、スタート！

笛を吹く治郎と、その足許に寄り添う春子。

治郎、ぴたっと笛を吹き止める。

治郎 行くな。都になんが、行くな。頼む。

春子 わだすだって、行きたぐねえだ。治郎サのそばを離れたぐねえだよ。

- 治郎 なら、行くな。おらと夫婦になっぺ。んだ、逃げよう。どこか遠いところサ行っで、夫婦になっぺ。
- 春子 わだすだって、そうすたい。んだけど、わだすが都に行がながったら、村の人たつが……（涙）
- 治郎 おめ、そったなこといっで、ほんどは、都さ行きてえんだべが？ あおによし奈良の都は咲く花のって、そったなきらびやかなところさ、あごがれでるんでねべが。
- 春子 そんなんでね。わだすがどれだけ安積の里を好きか、治郎サが一番よく知ってるべ。この山で、川で、野原で、子どものころから、いっしょに駆け回って遊んだんだがら。なつかしいでねえが。覚えてっか？ ♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい♪山こえて 川こえて コンコさま いーだーがい♪（泣き崩れる）
- 治郎 小春————。

▼奈良の都B

- 春子 そったなわけで、わだすは采女とすて都に上ったのでござえますだ。名前も、小春から、春姫となりますた。
- 都人1 おもしろいおなごじゃのう。
- 春子 ふん。（ぶいっと背を向ける）
- 都人2 どこの山出し娘じゃ。
- 春子 ふん。（ぶいっと背を向ける）
- 都人3 気の強いところが、またかわいい。
- 春子 ふん。（ぶいっと背を向ける）
- 都人4 春姫さま、贈り物でございます。どうか、お受け取り下さいませ。
- 春子 来んでねえだ！ わだすには、ふるさとに治郎さという人が…。
- 都人1 春姫さま、きょうは猿沢の池の月見の宴でございます。ぜひ、いらしてくださいませ。

猿沢の池のほとり、満月の宴。

- 都人1 お、雲が、雲が晴れてきたぞ。
- 都人2 ああ、月が、月が見えてきた。
- 都人3 美しい月よのう。満月の宴にふさわしい、見事な月じゃ。
- 都人4 今宵は、帝もお見えになるそうじゃ。
- 春子 いい月夜だった。んだけど、わだすの心はそこには、ねがった。光る月を見

るほどに、ふるさとの安積の里がなつかしくでならねがったんだ。

M 笛の音

春子 ああ、この月の光は、きっとあの山に、野原に降り注ぎ、川を、泉を、田を、きらきらと光らせているのだらうと思うほどに、もう帰（けえ）りたくて帰りたくて、たまらない気持ちになったのごぜえますだ。治郎サのこどが、恋すくて恋すくて。

笛の音、異常に高まり、ぴたっと止まる。

春子 一計を案じたのでごぜえます。わだすは月見の宴からそっと抜けだし、物陰で、だれもいなくなるのを待っただ。

暗くなる。柳の木が一本。春子、木に駆けよる。

着物を脱ぎ、柳の木にかけ、草履も脱ぎ、合掌をすると、くるりと背を向けて走りだす。

ひたすら走る春子。つまずいて転び、起きてはまた走る。走る走る走る。

都人1 采女が逃げたぞ。

都人2 采女が逃げたぞ。

都人1 探せ、探せ、まだ遠くには行ってないはずだ。

都人4 あ、こんなところに着物が。

都人3 采女の着物だ。草履もあるぞ。

都人4 池に身を投げたのか。

都人1 そんな。

都人2 まさか。

都人3 まさか。

都人4 まさか。

都人1 こんな浅い池で身投げなんて！

都人2 3 4 ありえない！

都人1 ありえない。

都人2 身投げのふりをして、逃げたのでありましょう。

都人1 そうだろう。きっと、そうだ。大方、ふるさとに逃げ帰ったのであろう。

都人3 では、帝にご報告を。

都人1 待て待て。

都人4 待て、とは？

都人1 こんな小細工までして逃げだすとは、不憫ではないか。帰してやろうではな

いか。表向きは、猿沢の池に身投げした、ということにして、逃がしてやろうではないか。

都人 2 3 4 はいっ！

春子 わだずは走りますだ。裸足のまま、都から逃げだしました。そして、とうとう、ふるさとが見えできたのです。

春子 (息を切らせて) ああ、安積の山だ。山が、見えてきた。治郎サのいる山が。
農民 1 おや、おめさまは。あっ！(あわてる) 小春、小春でねえが。都に、采女さあがった、小春だべ？

春子 うん。

農民 1 うわーっ、て、てえへんだーっ！(と叫びながら、村の方へ走っていく)

農民たち (口々に) てえへんだ。小春が。とんでもねえ。なんだと？

春子 ああ、みんな、迎え来でくれだんだねえ。

農民 2 とんでもねえ。帰(けえ)れ、さあ、都に帰れ。

春子 そ、そったな……。

農民 3 ここは、通さね。おめさまは、年貢の代わりに貢がれたおなご。安積に戻ったことが知れたら、おらたづ、どんな目さ遭うが。帰れ、さあ、いますぐ都に帰れ！

春子 そったなあ……。安積が恋しくて恋すくて恋すくて、走(はす)って走って走って戻ってきたのに。(泣)

農民 4 泣ぐな。さあ、帰れ。帰れ！ ほら、ごさおにぎりあっから。なけなしの米で焚いたおにぎり、おめさ、やっから、さあ、都に帰れ！(泣)

春子 わがった。行くべ。都さ戻るべ。んだけど、一目、一目治郎サに、会わせてける。

農民たち そ、それは…。

春子 治郎サ、なじよすた？ 何があっただ？

農民 1 治郎は、ねぐなっだ。おめさがいねぐなっで、はあ、物も食わねぐなっで、とうとう山の泉さ、身を投げで、死んですまっただ。

春子 ああー———— (泣き崩れる)

M 笛の音

春子 あ、あれは、治郎サの、治郎サの笛の音。どこさいるんだ、どこさいるんだ、治郎サー。(探しまわる。泉をのぞいて) あ、見つけた。治郎サったら、泉のなかだなんて、こんなところに隠れて、バッカでねえが。ほら、唇がま

っ青でねえが！

治郎 （水から腕を伸ばし） ああ、春姫、春姫。

春子 （治郎に手を伸ばし） 治郎サ！ 治郎サ！

治郎 ここで暮らすっぺ。誰もこねえ、この静かな水の底で。二人だけで。

春子 うん！

ざぶん、という水の音。暗転

春子 そんなわけで、わだずは治郎さが身投げすた山の泉に身を投げたのでござえます。

僧 （読経の声） 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……………。

▼再び、猿沢の池

僧 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……………。

采女 かわいそう。かわいそうな春姫（泣く）

春子 はい（泣く）

采女 村のために身を捧げたのに、村人に殺されたようなもの。（泣）

春子 （きつと顔をあげ） いいえ。悪いのはお上。飢饉の村から、きつい年貢を取り立てて、年貢を納められねえとなれば、娘を差しだせだど、血も涙もねえ。

采女 （きつと顔をあげ） 違う！ 違うわよ。この話は間違ってる。帝とは、それはそれはすばらしいお方。月よりも太陽よりも、輝かしい光に満ちたお方。あのお方のお力ゆえ、この国は護られているのよ。その帝に愛されたのはこのわたし。わたしが采女。

春子 違う。わだすだ。村人のために采女として身を捧げ、笛吹の治郎サと天国で愛をまっとうすた、このわだすだ！

治郎 んだ。んだ、春姫。おまえが春姫だ。おらのいとすう春姫だ。

春子 あ、治郎サ！（走って行って抱きあう）

采女 なによ、そんな木こりの息子なんか。采女は帝のご寵愛もいだたけるというのに。そんな男に夢中になって命を落とすなど、愚の骨頂。

家臣たち 帝のおなり～。

采女 あ、大君さま。大君さま、おなつかしゅうございます。

帝 ん？ どこかで、会ったかのう？

采女 わたくしです！ 安積の采女です。

帝 あ、ああ。あの時は、楽しかったなあ。

采女 （うれしそうに） は、はい。

帝 猿沢の池のほとり、柿ノ本人磨らと、死んだ采女とやらの供養の歌会、あれはなかなか風情があったのう。ほほほほほ。して、どんな歌だったかな？

家臣たち ♪吾妹子のねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき～
 帝 ♪見るぞかなしき～。
 家臣たち ♪猿沢の池もつらしな吾妹子が玉藻かづかば水ぞ干なまし～
 帝 ♪水ぞ干なまし～
 采女 (愕然として) 大君さま…。違う、違うわ！ 帝はこんなお方ではない。
 春子 これがほんとうのことだ。現実を見るっぺ。
 采女 なによ、この偽物！
 春子 なんだ、おめが偽物でねえが！
 采女 なんですって！

SE ヒュードロドロドロ

乳母 こらこら、二人ども、喧嘩はやめろ。
 (同時に) 春子 あ、おがさん！ 采女 お里！
 春子 おがさん、死んだんでねがったのか？ おらは、おがさんの遺言で、ここさ
 来だのだ。
 采女 ほうら、やっぱり。お里のこと、おかあさんだなんて、小春、あなたは乳母
 の娘よね。自分で白状したんだから。ふふん。
 春子 おがさん、こんなところさ、何しに来ただ？
 乳母 うらみつらみは骨に浸み、千年万年十万年、消すに消せないこの毒に、わが
 身灼かれて苛まれ～
 春子・采女 きゃあ！
 乳母 いいが、よーぐ聞け。おめえたつは、安積の里に、たまたま同ず日に生まれ
 た娘たつ。里長さまの奥さまはお乳が出ねがったがら、おらが、めのとに。
 右の乳房で小夏を、左の乳房で小春を……いや、右の乳房で小春を、左の乳
 房で小夏を……いや……。
 采女 で、どっちが里長の娘なの？ わたしでしょ！
 乳母 そうでもあっか、そうでもねえか。
 春子 わだすだっぺ。
 乳母 そうでもあっか、そうでもねえか。実は、そこに深～い秘密があるんだ。
 采女・春子 秘密……。
 乳母 んだ。もう千年も黙っていだこどが。
 采女・春子 千年の秘密！
 乳母 その秘密、いまごで懺悔すっぺ。おらは、わが子の幸せ願って、赤ん坊の
 ころに、二人をこっそりと入れ替えて……。
 采女 ええー！
 春子 えっ。ま、まさか、そ、そったなこど！
 乳母 するわけねえべ。冗談だ、冗談。

僧 (虚ろに) は、はははは。こ、こんな時に冗談とは、お人が悪い。悪すぎる。

春子 なんだ、偽坊主。まだごごサ、いだが！

采女 お里。本当のことを、本当のことを教えて！

乳母 本当は……

采女・春子 本当は……

乳母 二人ともが、里長の娘。二人ともが、采女なんだ。おめえたつは、二人で一人。一人で二人なんだ。

采女・春子 はあ？

乳母 よーぐ聞いてけれ。昔々のごど、猿沢の池のほとりに着物を掛けて、姿を消した采女がおったでな。それは、安積から来た采女。なしてそったなことになったのが？

采女 帝をお慕い申しあげて！

春子 んでねえ、安積の治郎サが恋しかったんだ！

采女 なによ、あんな田舎男。

春子 なんだっ！

乳母 こらー！ 喧嘩はやめろっ。帝に焦がれた采女の心にも、安積の里をなつかしく思う気持ちがあるっぺ。治郎サを恋しく思う春姫にも、都に憧れる心もあったでねえが。んだべ。

采女・春子 はい。

乳母 二人で一人。一人が二人。どっちも本物、どっちもまこと。

春子 そ、そったな中途半端なお役人の答弁みでなごど。おがさんはどう思っでるんだ？ こったなこどになっで、ほんとは、どう思っでるんだ？

乳母 こったなこどって？

春子 おがさん、死んですまったでねえが。家にも戻れねまま、死んですまったでねえが。

乳母 え、死んだ？ おらが？

春子 んだ。家に帰ってえ、帰ってえって言いながら。

乳母 ああ、そうだ。そうだった。わたしは安積の里のお里。生まれ変わって福島の里子になったんだっけ。

春子 んだ。おがさん、悔すぐないの？ あの、あの怖ろしい地震の後、せっかく生き伸びだのに、おがさんは、もう家に戻れなくなっですまったでねえの。お上が、帰ってはいけねって、先祖代々住んできた自分の家なのに、戻ってはいけねって。

乳母 んだ、んだ。

春子 こんで、わだすの郡山の家さ来だども、おがさん、すっかり気落ちすてすまっで。家に帰ってえ、帰ってえって言いながら、とうとう……。

乳母 んだ、んだ。(ヒュードロドロ) ♪うらみつらみは骨に浸み、千年万年十年、消すに消せないこの毒に、わが身灼かれて苛まれ～♪ おらはええ、お

らは構わね。どうせ老い先短い命だったんだがら。どげな毒が降っても構わね。んだとも、子どもたちは、孫は、ひ孫は……。いつになったら、ふるさとに帰（けえ）れるだべが。

春子 見えねえ、見えねえものが、降り注いでいる。聞こえねえ、聞こえねえ歌がいつだってこの耳さ聞こえでる。千年万年十万年、ずうっと、ビクビクしながら生きで行かねばねえんだあ、おらたづは。なして？ なしてこったなことに！

采女 あら、あなたたちだって憧れたでしょう。お金のある豊かな暮らし。にぎわいに満ちた町。都会の匂い。だから喜んで受け容れたんでしょア・レ・を。ア・レ…。

春子 まさか。だれが、あったなもん。受け容れねば、やっていげねようさすたのは、どこのだれだ？ 都会のもんでねえが？ 安積の春姫の頃と、少しも変わんねえでねえが。嫌でも受け容れねば、おらたづ、飢えて死んですまう。村が滅んですまう。喜んで受け容れたのでね。追いつめられたんだ。

治郎 春姫！

春子 （はっとして）治郎サ！

治郎 帰（けえ）ろ。おらたづは、帰ろ、ふるさとへ。思い残したこの気持ち、どこまでも抱いて、また生まれ変わるっぺ。なづがすい、ふるさとに！ あの山、あの田畑、きれいな水の流れるふるさとを取り返すまで、おれたちは何度でも、何度でも死に、何度でも生まれ変わるっぺ！

采女 わたしは、あの、わたしは……。

治郎 来い。おれたづはみな同じ、安積の里から生まれた魂なんだがら。

采女 は、はい。

治郎 さ、おがさも、ここへ。

乳母 はい。

治郎 おれたづは民草。踏みづけられでも、踏みづけられでも、新しく生まれ、生まれ直すと、生きていぐんだ。ふるさとを取り戻す日まで！ みんな、いいが。

みんな はい！

治郎 行ぐっぺ！

みんな はいっ！

ザブーンという大きな音。暗転。笛の音。僧の読経の声。明転。

僧 さ、この手を、手を掴んで。ほら、もう少し、もう少しこっちへ。

春子 は、はい。（池から這いあがる）

僧 ああ、よかった。危ないところだった。びっくりしたあ。いきなり池に飛び込んだりして、どうなることかと。こんな浅い池でも、溺れるときは溺れる

と言いますからねえ。さ、これを。(手ぬぐいを出す)

春子 ああ、ありがとうございます。坊(ぼん)さまは、命の恩人です。

僧 いえいえ(照れる)。しかし、どうして身投げなんか。

春子 なんだが、わがらねども、どうしても飛びこみたぐなって。あの、わたす、
なんだかすんごい旅をすてきたような気がするだ。

僧 実は、わたしも、大変なものを見てきたような。そうだ。あの、これ。

春子 あ、これは。おらのお布施。

僧 これを(といて、少しためらい)これを、ふるさとのみなさんのために使
ってください。

春子 ああ? これは、わたすがお布施したお金。もどもどわたすのお金ではねす
が?

僧 で、ですが、いまはわたしのものですから、このわたくしからの寄付という
ことで、ひとつ。

春子 ああ。なんか、ヘンだが……ま、いっか。そうすっぺ。ありがとうございます
すだ。母の遺言の、供養のお経も読んでもらったことだし。

僧 わたしはきょうから、本気で修行することにしました。この日の記念に、般
若心経のこの扇子、いただいてもよろしいでしょうか。

春子 んだ。もらってけろ。

僧 では。(般若心経の読経を始める)

春子 (唱和する)

出演者、亡霊のように集ってくる。

安積の里の者たち、童歌を歌う。

都の者たち、柿ノ本人麿の歌と帝の歌を朗詠する。

原発関係の「現時点での」ニュースのアナウンス、重なる。

声、高まる。

すべての声が突然途切れる。

終わり

【配役】

僧 近鉄奈良駅前の托鉢僧
春子 郡山の春子＝小春（乳母の娘）＝春姫（里長の娘）
采女 奈良の采女＝小春（乳母の娘）＝采女（里長の娘）
乳母 春子の母＝里長の娘の乳母

里長

治郎 春姫の恋人 笛の名手

子どもたち

村男 1

村男 2

村男 3

村男 4

村女 1

帝

人麿

葛城王

家臣たち

都人 1

都人 2

都人 3

都人 4

都女 1

都女 2

都女 3

都女 4

農民 1

農民 2

農民 3

農民 4

子ども

母